

# 安岡章太郎「質屋の女房」論

前田 久徳

「質屋の女房」は、昭和三十五年『文芸春秋』五月号に発表された安岡章太郎の短編小説である。これを収めた短編集が三年後の三十八年に刊行された際、その書名に本作の題名が冠せられていることから、この作品は作者にとつてそれなりの自信作であつたことが窺える。

\*

主人公〈僕〉は、〈おふくろ〉との二人暮らしで、〈おふくろ〉のうるさい干渉に反発しながら、〈毎日学校へも行かず、友達の下宿で妙なものを書きつづ〉ったり、〈旅行に行く〉と称して吉原や玉の井へ泊まつてくる」というぐうたらな生活を続ける学生で、安岡の初期作品で繰り返し描かれた主人公の生活がここでも出現する。

ある日、自分の部屋にしまつておいたはずの友人からの手紙を母が勝手に引き出しているのに腹を立てた〈僕〉は、母への面当てに、〈質屋で金をつくつて、どこかへ出かけてみようと思ひ、母の手前それまで避けていた近所の質屋へ冬物の外套を持つて出かけていく。これを契機に〉〈僕〉はこの質屋へ足繁く通い始めるのだが、店には五十格好の主人はめつたに姿をみせず、男と二十ぐらゐは差がありさうにおもへる、〈普通に結婚してゐるおかみさんのやうにも見えない〉女がいつも座つていて、彼女と親しく話を交わすようになる。

ある日、彼女から質に入れっぱなしにしたまま出征した学生の本の整理を頼まれる。整理が終わつて、お札に夕食を食べて行くように言われたのを辞退すると、夕食は主人からの言いつ

けであつたらしく、「こまつちやつたな。ああ、こまつちやつた」と小声で言つて困惑する彼女をみて、〈僕は不意に、うつ向いて立つてゐる彼女の軀を抱きしめてやりたくなり、そのまま交渉をもつてしまふ。あたりがすっかり暗くなつたところ、帰宅すると、召集令状が届いていた。〉

入営までの一週間は慌ただしく過ぎてしまい、とうとう明日が入営となつた、その前夜、質屋の女房が以前預けた外套を持つて訪ねてくる。その時、彼女が最後に遺していった言葉に、〈僕は〈恥じらひのあまりほとんど恐怖に近い心持を味は〉い、ただ茫然と立ち尽くしてしまふ。〉

以上が、この作品のあらすじである。

母からの遁走の装いで出発した物語は、〈僕〉が〈恥じらひのあまりほとんど恐怖に近い心持を味は〉わされる最終場面に至つて、一挙にその様相を変える。この作品を成り立たせている要諦は、作者が仕掛けた最終場面でのどんでん返しにあり、この部分を正確に押えることが作品理解の要となるので、まずは、最終部分の確認からはじめる。

質屋の女房とのことがあつてから一週間、いよいよ明日が入営日というその前夜、突然彼女が〈僕〉の家の玄関に立つ。

《夕食をはつたころ、一とき、潮がひくやうに家ちゆう

が静まつたときだつた。玄関で低い声がした。何げなく僕は自分で立つて出た。

暗い格子戸の外に立つてゐる人影を見たとき、僕は喉がつまりさうだつた。……彼女だつた。ネズミ色の和服コートの上に、町会の婦人部のバッヂをつけてゐるのが、なぜか憐れだつた。

「お忘れになつたのかと思つて……」

僕は胸の中が真つ黒くなるやうな気がした。決して忘れてたわけではないにしても、彼女のことを思ひやることがまつたくなかつたのは、たしかだつた。……しかし、僕が恥ぢらいひのあまりほとんど恐怖に近い心持を味はふのは、まだこれからだつた。

「これを……」

と、彼女は微笑をふくむやうに差し出したのは、四角く畳んだポツテリとした手ざわりでやつと憶ひ出した僕の外套なのだ。

「途中で風邪をひかないやうに……。それから、これは失礼かもしれませんが、あの方はあたしからのお饞別にさせて」

彼女は明るい笑ひをうかべながら、それだけ云ふと、さつさと暗闇の中に姿を消した。僕はただ一言もなく、しば

らくの間は無意味に指の腹で、外套のすこし擦り切れた襟のあたりを撫でてゐた。」

ここで、《僕》はふたつの勘違いをする。

《お忘れになつたのかと思つて》と言つた彼女の言葉、《僕》は、わたし（＝質屋の女房）のことを《お忘れになつたのかと思つて》と聞き違えるのである。だから、《決して忘れたわけではないにしても、彼女のことを思ひやることがまつたくなかつたのは、たしかだつた》などとやに下がつて、思わず色男ぶつた言い訳のことを胸の内ですべてやいてしまふ。しかし彼女は単に、預けたままになつていた外套のことを《お忘れになつたのかと思つて》と言つたに過ぎなかつたことを、《四角く畳んだポツテリとした手ざわり》の外套を差し出されて思い知らされる。

《しかし、僕が恥ぢらいひのあまりほとんど恐怖に近い心持を味はふのは、まだこれからだつた》。彼女は《僕》に鉢を与えたことを《あたしからのお饞別》だと《明るい笑ひをうかべながら》恬として言い放ち、さつさと暗闇の中に姿を消してしまふ。彼女が《僕》のことを想い、《僕》にもそれなりの想いがあつたという彼女との《関係》は、《僕》の勝手な思いこみに過ぎず、彼は自分の誤解に強烈なしつべ返しを喰らつて、

《恥ぢらいひのあまりほとんど恐怖に近い心持》に捉えられたまま呆然と立ち尽くすところで、この作品が閉じるのである。そして、うかつにも信じた幻影が、女の一言ではかなく崩壊した《僕》の前には、入営という非情な現実だけが拡がっている。以上は、単純な作品表面上の読解に属することだが、それが必ずしも自明ではないらしいので、敢えてこの確認からはじめたのである。たとえば、佐伯彰一は、この作品について以下のように述べている。

《「お忘れになつたのかと思つて……」と口ごもるやうに呟く彼女に対して、「胸の中が真っ黒くなるやうな」思いを味わされるのは、「僕」の方だ。「決して忘れたわけではないにしても、彼女のことを思ひやるのがまつたくなかつたのは、たしかだつた」ここで鮮やかな一撃をくつてよろめかざるを得ないのは、「僕」の男性的エゴイズムではなかつたか。あの質屋の蔵の中の、思いがけぬ情事の後で、「僕」がいい気なひとりよがりの勝利感にひたつていた、とまではいうまい。もちろん、「僕」には、さらにもう一つの不意打ち、一週間の猶予しか許さない召集令状という代物の来襲があつたにせよ、情事の相手に対する「思ひやり」が、全くないがしろにされていた点は、認めざる

を得ない。「僕」が、「恥ぢらひのあまりほとんど恐怖に近い感情」を味わわれるのは、そのためである。客観的に見て、どちらがより、身勝手で、より自己中心的などという話ではない。わが身のいい気さ加減、脂下がった色男ぶりを、眼前につきつけられて、狼狽なす所をしらぬのが、「僕」の方だ、というだけで十分だ。その証拠に、相手の「女房」は、一言の非難も、恨みがましさも洩らすことなく、「明るい笑ひをうかべながら、さつさと暗闇に姿を消す」のである。この引け際の鮮やかさ、このクライマックスの場面において、舞台をかつさうシテ役の所在は、一点の疑念の余地もないだろう。シテの姿を消した舞台に、ひとり残された「僕」が、「ただ一言もなく」「無意味」に外套の襟のあたりを撫で廻す他ないのも当然の話であった。》（佐伯彰一「安岡章太郎」〔伝記と分析の間〕所収、昭42・12、南北社。以下佐伯の引用はすべて同書）

見てのとおり、明らかな読み違いである。上の引用の少し前に、〈餞別としてのあの古外套をかかえこんで〉との言い方からも明らかなように、誤読は〈餞別〉の指示内容の誤解に端を発し、それが〈僕〉の味わう〈恥ぢらひのあまりほとんど恐

怖に近い心持〉や、〈一言の非難も、恨みがましさも洩らすことなく、「明るい笑ひをうかべながら、さつさと暗闇に姿を消す」という女房の人物解釈にまで及ぶことになった。こうして、佐伯の読みは、〈若い男性の身勝手さが、あばき立てられ、その傲慢にふさわしい罰をふりあてられる過程の物語〉、〈男性的エゴイズムの懲罰の物語〉としての理解へ収斂する。もつとも、小説の読み巧者として鳴るだけに、へしかし、この最後に打ちのめされた「僕」の前途に、待ち受けているのが、兵営であり、戦場であったことを見落すのは、公平を失する話であろうと、この小説の重要な要素である〈僕〉を包み込んでいる時代状況の指摘を忘れてはいない。

《ただ、このエゴイズム摘発と懲罰のプロセスが、さらに大きな枠組みの中にはめ込まれている点を見逃す訳にはゆくまい。つまり、ここにおいて、一切は戦争の影の下に起っている。古い外套が、案外いい値ぶみをされるとか、イタリーでパドリオ政権が成立した、といった程度の間接的な言及しかなされていないけれども、ここにおける一切の物の上に、「僕」の吉原行きの「旅行」の上にも、また「女房」がコートの上につけた「町会の婦人部のバッジ」の上にも、避け難く、戦争の影が落ちてゐる。その点が控

え目に抑制されていなければならないだけ、向こう側に大きく楔にうつした影絵のように、戦争が浮かび上がってくる、陰面の形における戦争小説とさえ、呼びたくなるほどに。」

これは確かに重要な指摘なのだが、〈男性的エゴイズムの懲罰の物語〉が、戦争という〈さらに大きな枠組みの中にはめ込まれている〉という程度の指摘にとどまり、両者の有機的つながりにまで佐伯の目が届いていない。これもまた、先の読み誤りのせいで、最終部に用意された仕掛けを無視した結果である。

どうもこの小説は、発表当時から同様の読み違いを誘うところがあったようで、これが発表された翌月号の『群像』（昭35・6）誌上における、奥野信太郎、山本健吉、佐藤朔による「群像創作合評」でも、佐藤が梗概を〈主人公がどうしても受け出せなかった外套を置いて「あたしからのお饞別にさせて」といって暗闇の中に姿を消す」と説明して、山本から訂正を受けている。佐伯にしろ、佐藤にしろ、同じ読み違いをしたとはいえ、それを作品のせいに帰するわけにはいかない。作品の表現に舌足らずなところがあつたわけではなく、読み手の側の不注意な思い違いに過ぎない。因みに、この「創作合評」では、質屋の女房について、〈女の色気、コケツトリと、あるさびしさがよく描けている〉（山本）という点で本作を評価し、（佐

伯も、この短編の真のシテが、「僕」ではなくて、「質屋の女房」である」と見ている）、また〈コント的な、気のきいた短編〉、〈海辺の光景（群像十一・十二月号）を書いたあと、ちょっとした息抜きといった意味で書いたコント〉（山本）と見る点でも三者の見解は一致している。

\*

最終部の読みに関わつてやや深入りし過ぎたが、話を本筋へ戻す。

〈僕〉に強力な一撃を加えて、女が夜の暗闇に消えたとき、彼女との〈関係〉が幻影にすぎなかったことが明らかに、〈僕〉がそこに見ていたものはかなく崩壊して、〈僕〉の前には、入営という現実だけが拡がっている。

では、〈僕〉は彼女との関係を何を見ていたのか。

まずは、彼女に頼まれて、庫の中で本の整理をする場面から。

〈僕はふと、この男も自分のやうに、これらの本を何冊かづつ抱へては、この質屋にやつてきたのではあるまいか、とおもつた。読みもせず、売りとはしもせず、ただあとで利子をつけて取りかへすために、一冊買つては一冊質に入れ、またその金で一冊買ふ、そんなことをくりかへしてある男のことが、急に一種の親しさをもつて感じられてきた。

と同時に、そんな機械的な反復のほかには何もせず、何をしようとも思はなかつた男が、この金網に囲まれた庫の中で自分と向ひあつてゐるといふ、何ともイラ立たしい幻影が僕にまつはりついてくるやうな気がした。』

へ一冊買つては一冊質に入れ、またその金で一冊買ふ、そんな無意味な「機械的反復」を繰り返したのは、この学生ばかりではない。ほかならぬ「僕」自身、「機械的反復」の生を送る日々だつたはずである。新学期が始まつても「相変らず学校も怠け、墮落することにも熱意がな」くなり、悪友たちのやうに「思ひ切つたことが出来ないし、それ以上にマメに勤勉に「墮落の道」を歩きつづける根拠」をなくし、それよりは、いつそ質屋で話しこんでゐた方がマシにおもへ、質屋通いを繰り返す「僕」の生は、「機械的反復」そのものであつたはずである。「僕」もまた出征した学生と同質の生を生活している。この学生に「一種の親しき」を感じた所以だが、同時に「僕」は、その学生と「この金網に囲まれた庫の中で自分と向ひあつてゐるといふ、何ともイラ立たしい幻影が僕にまつはりついてくるやうな気がした。つまりは、この金網に囲まれた庫の中」のような状況で繰り返している自らの「機械的反復」の生を嫌悪し、そこからの脱出を願つてもいるのである。

このとき、質屋の女房は、「機械的反復」の生とは違う世界を「僕」の前に垣間見せてくれる。上の引用に続く部分が、このことを端的に告げている。

本の整理をしている「僕」のところへ入つて来た彼女は、慣れた手つきで片側の壁に梯子を掛けると器用に上つてハトロン紙のたとうに包まれたものを抜き出す。床に腰を下ろしたまま、下から見上げるかたちで「危ないぞ!」と声をかけたので、彼女は身を固くして「いやア」と女学生のような声を上げる。ぎこちない動作で梯子を下りきると、

#### 《「意地悪」

と短く云つて、出て行つた。すると僕は、まつはりつてゐる「反復」の幻影から、ほんのしばらく自分脱け出してゐることに気がついた。』

質屋の女房は、「機械的反復」とは異なる世界を拓いてくれるのなら、彼女との小さな情事によつて成立した「関係」は、「僕」が確かな手応えをもつてその世界を自分の手にしたことにはかならない。しかし、最終部で、彼女との間に成立したと信じた世界は、彼女の強烈な一言で、脆くも崩れ去り、所詮それは幻想でしかなかったことが露呈する。幻想の消えた「僕」

の前には、明日から始まる軍隊生活という現実が、抗いがたい重みで拵がつている。この作品は、戦争という脱出不可能な暗い時代状況に閉じ込められて身動きのとれない青春を、《僕》のささやかなアバンチュールに托して描いたものである。

\*

作品自体はきわめて短く、こじんまりした世界ではあるが、作者の細かい計算が隅々まで行き届いていて、完成度は高い。女房の前歴ひとつとつてもそれは明らかである。彼女を廓勤めの経験者として設定することで、《僕》へ強烈なボディ・ブローの一撃を与える最終部の場面が可能となった。鉢を金銭に換算できる女性でないとそれは不可能である。また、彼女の前歴は、二十ほども年上の《おとうさん》を旦那に持つ現在のさびしい境遇へもすんなりと対応し、へつまらないわ、わたしは。こんなもの（注、映画の切符）を買っても外へ出るわけには行かないんだから」と洩らすことばに、閉塞状況に閉じ込められている《僕》との同質性も暗示されている。

また、最終部を予告する以下のような伏線もさりげなく張られていた。

《……店の中は、いつもひとつそりしてお寺のやうに陰気だった。奥に金庫のやうに頑丈な鉄の扉のついた倉庫が見え

る。そこから死んだやうに重苦しい空気が冷たい風になつて流れ出し、あたりを徹の臭ひで浸してゐた。

ただ彼女が笑ふと、そのまはりだけが灯がともつたやうに生きかえつて、まともな、人の住んでゐる家を想ひ出させるのである。

僕は用心しなければいけないと思つた。あれから「おとうさん」はほとんど店へ姿を見せなかつたが、彼女の笑顔を見るたびに、そのうしろすがたに寛大なのか、ぬけめがないのか判らない、巨きな男のゐることを忘れるわけには行かなかつたからだ。》

最終部への伏線といったが、むしろ作品世界全体を象徴する部分といった方が正確であるかもしれない。《ひとつそりしてお寺のやうに陰気な空間を《死んだやうに重苦しい空気が冷たい風になつて流れ出し、あたりを徹の臭ひで浸してゐる。この空間は、そのまま《機械的反復》の生を強いられている《僕》の状況そのものであり、彼女の笑顔が、そこに灯火をともして人間の暖かさにくれる。しかし、彼女の笑顔の背後には、得体の知れない《巨きな男》の存在がある。それを《忘れるわけには行かなかつた》といい、《用心しなければいけない》といいながら、うかつにも《僕》は、この自戒を忘れて《彼女の

笑顔」に氣を取られ、甘い夢に酔う。だが、彼女が笑いを消して素顔に戻ったとき、あらためて「僕」は、戦争という「巨きな男」の存在をしたたかに思い知らされるとというのが、物語のプロットであるから、この部分は最終部への伏線という以上に、作品全体を象徴する部分である。

単なる伏線レベルでなら、はじめてこの質屋を訪ねた場面を叙した冒頭近くの部分がそれに当たる。女が笑うと、「女の白粉気のない顔が、急に輝いてみえるし、「彼女は単に、これまで取引のなかつた客に取らなければならない手続きを省略しよう」と云つただけ」のことばを、「この人は、僕が質屋になど来たことのない坊ちゃんだと思つてゐるのだらうか」と勘違いする。最終部との呼応は明らかで、作者に伏線の意図があつたのは、女が笑うと「急に輝いてみえた」ことを「なぜだろう」と差異化して語っていることから知れる。

ことのついでにいえば、このとき預けた冬物の外套は、襟の一部が擦り切れていたせいで、当初の値段の半値になつてしまふ。「飛び切り高い値段」をつけられた喜びが、たちまち「ひどく情けない気持」へ転落する。高揚から落胆へ、あるいは緊張から肩すかしへという心理体験は、最終部で「僕」が体験する心理ドラマと正確に呼応している。

だが、作者の計算の周到さは、このような小説作法上の基本

的な部分だけに示されているわけではない。なによりも、「僕」を閉じ込める閉塞状況を様々なレベルで繰り返し、それらのイメージを最終的に時代の閉塞状況へ収斂させていく手際に注目すべきであろう。

作品は、母親が過剰な干渉で「僕」を束縛し、閉じ込める話から始まつていた。それへの反発で近所の質屋へ通い始め、そこで親しくなつた「質屋の女房」は、文字通り「囲われ者の境遇にある。「僕」との同質性は明らかだ。そして、「僕」が整理を頼まれた本の持ち主。彼もまた時代状況の中で「機械的回復」の生を強いられた存在だつたし、その男と「向ひあつてゐる」気分になつたのは、「金網に囲まれた庫の中」だつた。こうして、ある状況に閉じ込められたイメージを丹念に重ねながら、それらを戦争という脱出不可能な時代状況に「僕」が閉じ込められていたことが鮮烈なかたちで提示される最終部へ収斂していくのである。

もちろん、そのために作者は、時代への言及を怠つてはいなかつた。質屋に持つて行つた外套に予想外の値がつく箇所には、「戦争が長びくにつれて、むかし買つた古い物の値が逆にだんだん高くなつてゐることはたしかだが」云々とあり、映画館に入ると「バドリオ政権ができてから禁止されているはずの「フアシストの歌」をやつてゐるので、おやと思ひ、出てみると町



ではイタリヤの降伏と、ムッソリーニの復権をつたへる号外売りが走つてゐたり」と、《世の中は、いよいよ奇妙な混乱を起してゐた》ことを告げてゐた。《徹底した陸海軍の下級将校を、速成でおきなひをつけるために、大量の学生が動員されはじめ》、次々に本を質入れした学生もその一人であつたことも語られていた。

こう見てくると、作品の隅々まで作者の計算が行き渡つてゐることは明らかである。こうした周到な用意の上で、暗い時代状況に呑み込まれて《機械的反復》の生を強いられた青春を描いたのである。

ただ、《僕》と時代状況との関係、あるいは《僕》の時代認識について、一応の注意はしておいてよい。彼と母との関係にも同様のことがいえる。母への面当てに近所の質屋へ通う程度の幼い反抗はするにしても、《おふくろは僕に何もさせたがらず、また僕もいつまでたつても何も出来ないといふことが彼女を満足させてゐた》のが母との関係の基本だつたとすれば、《僕》は母の世界を甘受し、それに包まれて自我を眠らせてゐる。だからこそ、《いつまでたつても何も出来ない》。その意味では、母と《僕》とは共犯関係にある。

《僕》を取り巻く外界は、彼の目には明確な輪郭で見えてこない。質屋の女房にしても正確なところはよく判らず、《彼女

の主人（と云ふべきか旦那と云ふべきか）である大男のことは、一層わからなかつた。あちこちに、いろいろの種類の店を何軒かもつてをり、日をきめて一軒づつ廻つてゐるやうな風だつたが、それもはつきりわからない。外界が明確な輪郭を持たないゆえに、得体の知れない不気味さに満ちてゐる。《あらゆるものが、中途半ばで消えてなくなつたり、かと思ふと、いきなり途中から始まつたりしてゐるやうだつた》という時代認識についても同様だろう。この曖昧な雰囲気の中で、《僕》は《墮落する》熱意すら奪われ、《いつまでたつても何も出来ない》状態のまま《機械的反復》を繰り返すしかなかつたのである。

だからどうだと、いま性急な結論を出すつもりはないが、この作品が発表された約半年前には、安岡の初期世界の総決算ともいふべき「海辺の光景」が書かれてゐること、終戦から十五年がたつた時期に、戦時下の青春を書いたこと、そうした事情との関わりで、考へてゐる必要はありそうである。小稿は、そのための基礎作業として、ひとまず「質屋の女房」の読解に焦点を当てたものである。

（本学教官）